

# 強度行動障害をともなう知的・発達障害児(者)の全般的な身体合併症の治療実践

芳野 詠子<sup>†</sup>第76回国立病院総合医学会  
2022年10月8日 於 熊本

IRYO Vol.77 No. 5 (337-341) 2023

## 要旨

強度行動障害をともなう知的・発達障害児(者)は、運動能力が高く一見元気そうに見える。

痛みや身体の不調に対する反応が鈍く重篤化するまで普段同様の行動をとり続けることが多いので身体の不調に医療者側が気づきにくい。日常とのわずかな差異に医療者側が早く気づき対応することが大切である。

国立病院機構やまと精神医療センター(当院)での強度行動障害をともなう知的・発達障害児(者)の死亡退院症例の死因、および身体合併症による転院症例の転院理由は共に肺炎とイレウスが多数を占めた。

身体合併症はイレウス・便秘等の消化器疾患、嚥下摂食機能障害・誤嚥性肺炎等の呼吸器疾患、尿路感染・神経因性膀胱等の泌尿器疾患、骨折・骨粗鬆症等の筋骨格系疾患、創部感染・白癬症等の皮膚感染症、感染性結膜炎・麦粒腫等の眼感染症が多い。

病棟では集団生活のため、呼吸器感染症や感染性胃腸炎がアウトブレイクすることも多い。以前よりインフルエンザ用、感染性胃腸炎用のフェーズ表を利用していたが、昨今の新型コロナウイルス感染症に対応するために新たにフェーズ表を作成した。病院内全職員が一目で現状を知り行動する一助となっている。

今回当院で実践している検査、治療、対応について解説する。

キーワード 強度行動障害, 知的障害, 発達障害, 身体合併症

## はじめに

強度行動障害をともなう知的・発達障害児(者)は重症心身障害児(者)の中では比較的元気そうに見えるが、高齢化にともない身体合併症をきたす症例が増えてきている。

幼少期より口腔内を清潔にすることが難しく、ま

た嚥下摂食機能も未熟なまま成長しているため、若いころはかき込み食べによる食事の誤嚥、自身の唾液の誤嚥、反芻後再嚥下時の誤嚥などがあっても肺炎に至ることは少ない。しかし、年齢を重ねにつれ、誤嚥性肺炎をおこすことが増えてくる。また、抗精神病薬や副作用予防のための抗コリン薬を使用していることが多いため、腸管運動が低下している

国立病院機構やまと精神医療センター 内科・呼吸器科 <sup>†</sup>医師

著者連絡先：芳野詠子 国立病院機構やまと精神医療センター 〒639-1042 奈良県大和郡山市小泉町2815番地

e-mail : yoshino.eiko.pz@mail.hosp.go.jp

(2023年1月20日受付 2023年6月9日受理)

Therapeutic Practices for Physical Complications of Persons with Intellectual and Developmental Disabilities

Eiko Yoshino. NHO Yamato Psychiatric Medical Center

(Received Jan. 20, 2023, Accepted Jun. 9, 2023)

Key words : significant impairment of behavior, intellectual disability, developmental disability, physical complications